

透明度世界 冬の「バイカル湖」を訪れて

近藤 節夫 (エッセイスト)

終戦後シベリアに抑留された旧日本軍兵士らの強制労働によって完成した市電が疲れたように市内をノロノロ走っている、シベリア地方の中心都市イルクーツクからバイカル湖まで車なら1時間で行ける。目の前に雪と氷に覆われたバイカル湖が視界に入った11月初旬、夢見るような幻想的なシーンに脳天を叩かれたようなショックを覚えた。それから10年後長い冬も終わりを告げようとする3月、シベリア鉄道で横断中にバイカル湖南岸のムイソウヴァヤからリストビヤンカへ旧バイカル湖環状線を4時間かけてゆっくり巡り、車窓から眺めるこの湖のえも言われぬ雪中の夢の世界と身体に感じるパワーには心が揺さぶられるようだった。身も凍る極寒のバイカル湖の魅力的な真髄は、雪に覆われたこの冬の間にこそ感じられる。

日本の湖に比べてあまりにも強烈な迫力ある存在感には、言葉もない。湖畔に立つと目の前の広大な湖には圧倒されるが、湖の形としては三日月型をしており霧さえ晴れば遠くがまったく見えないということはない。

「バイカル湖」とその名を聞けば、ロシアの取り留めもなく大きく世界一透明な湖のイメージが浮かんでくるだろう。実際面積では世界最大のカスピ海には及ばないにせよ、琵琶湖の50倍の広さである。とりわけ40mの透明度、1,741mの水深、そして地球上凍っていない淡水の2割の水量は、いずれ



シベリア鉄道バイカル環状線から湖上の景色が素晴らしい

も世界一で、自然環境保護の見地からも高く評価されている。それだけではない。世界自然遺産に認定されたのは、この周囲にしか生息しない1千種類もの動植物の存在によってである。冬季は気温が零下30℃以下にまで下がり寒さのため栄養素は乏しいが、豊富な生物が多様性を持つことでも知られている。特に、世界で唯一淡水の中で生活する珍しいバイカルアザラシの存在はつとに有名である。その他にチョウザメやオムリを始めとする珍しい魚類が生息している。特にサケ科の魚オムリは、バイカル湖の美味・珍味として知られており、バイカル湖にしか生息していない。高い需要と多量に生息しているお蔭で、今もバイカル湖周辺の人々にとっては重要な食糧資源となっている。特産のオムリをつまみにウオツカを喉に潤せば、極北の寒波も感じない。

ロシア革命後に赤軍に追われた白軍の兵士や家族が、大シベリア冬季行軍で氷結したバイカル湖上を歩いて不

幸にも氷が割れ水没して多くの犠牲者を生んだことでも知られる。このバイカル湖の領有を巡っては、今日のロシアの領土征服欲を考えるととても想像できない話であるが、日ロ戦争直前には帝政ロシアと大日本帝国との間で、日本がロシアへ武力侵攻しバイカル湖以東の東シベリア占領を強硬に主張したり、戦争末期には講和条件に日本へ割譲することを主張した大それた隠れ話もあった。それが陸軍強硬派によるものではなく、象牙の塔に籠る東京帝大教授らバイカル博士と呼ばれた学者7人によるものだったというから驚きである。

バイカル湖南端からモンゴル国境まで僅か100kmと近いせいもあり、湖畔界限にはモンゴル系の人々が多く住んでいる。これも歴史的にチンギス・ハンが侵略し、古くから湖畔にモン



湖面が凍った冬の間は船を動かさない

ゴル系ブリヤート人が住んでいたせいでもある。冬になると彼らもあまり外へ出ることもなく、湖畔周辺には、人の姿を見かけることも少ない。それでも厚く氷結した湖面上を歩いている人を見ることもあるし、何と車が走行する光景を目撃することもしばしばある。

冬の間は湖面が氷結して漁船は動かせなくなり、半年以上錨を下したままである。短い夏が過ぎるとあっという間に冬になり、モンゴル人の営む商店も店じまいをしてしまう。極寒の地とはいえ、生活を営むには厳しいバイカル湖界限であるが、それでもバイカル湖らしい魅力的な雰囲気は、雪に覆われる厳しい冬にこそ見ることが出来る。

氷結したバイカル湖上に立つ筆者

